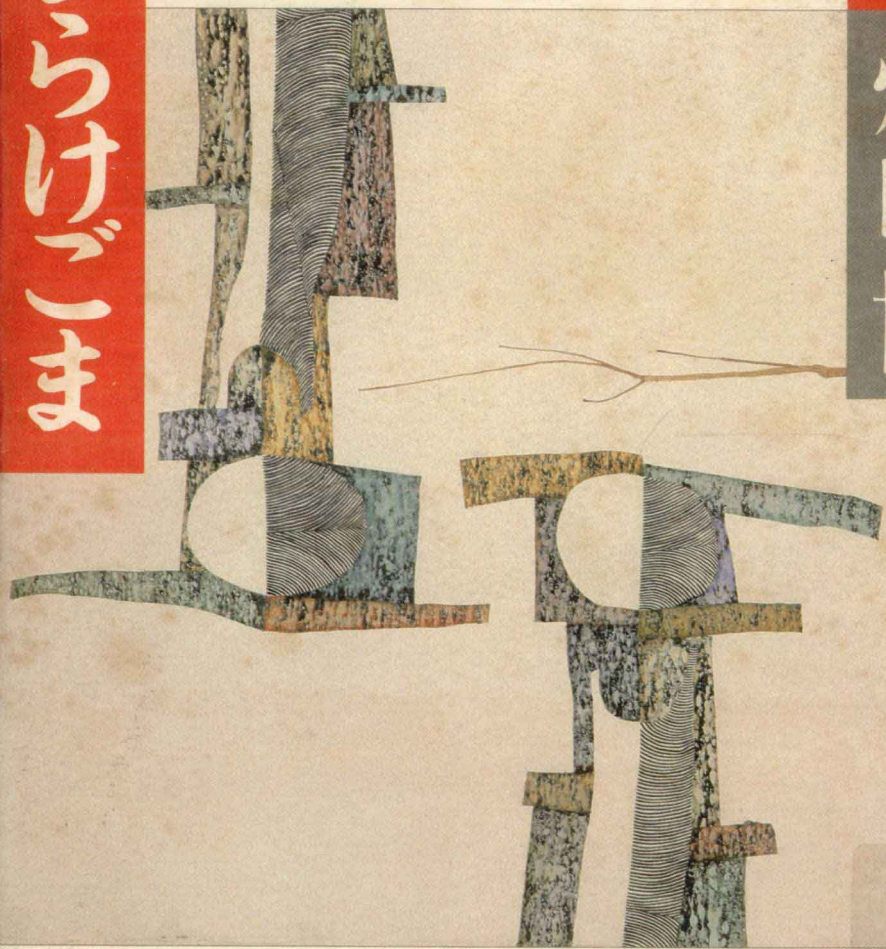


ドキュメント・

わが母

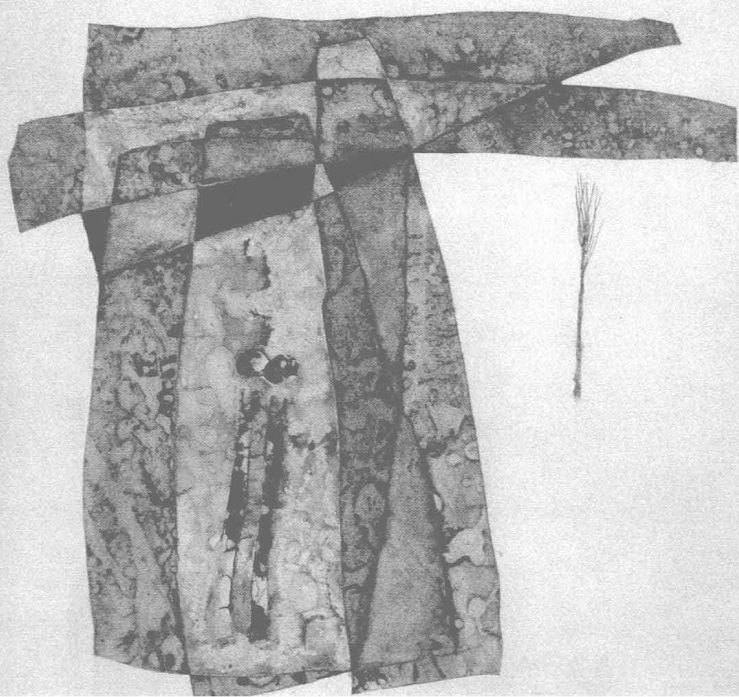
畑山博

ひらけづま



旺
文
社

デ
ント・わが母
けづこま
畑山博



ドキュメント・わが母
ひらけごま

昭和六十一年三月二十七日 初版発行

著 者——畑山 博

発行人——赤尾一夫

編集人——中山行雄

印刷所——共同印刷株式会社

製本所——共同印刷株式会社

発行所——株式会社 旺文社

〒162 東京都新宿区横寺町

電話〔編集〕〇三二六六―六三四三

〔販売〕〇三二六六―六四二四

(乱丁・落丁本はお取りかえしますので、本社に直接お申し出ください)

©1986 HIROSHI HATAYAMA

ISBN4-01-071353-4 Printed in Japan

(許可なしに転載・複製することを禁じます)

602052



20歳。東京銀座松坂屋統計部に勤めていた。



32歳。東京平井の家にて。
二年後に小諸へ疎開することになる。



左から博(5歳)洋子(3歳)直子(0歳)鑑緒里(30歳)東京馬込。
母にとって一番静かで安らぎのある一年間だった。



20代前半。結婚直前ごろ。



50歳、少女時代から憧れていた奈良へ初めて旅をした。

ドキュメント・わが母

ひらけごま 目次

北国の家族

9

とろすことんとん

113

あとがき

198

ドキュメント・わが母

ひらけじま

北国の家族

飛行機恐怖症の私は、列車でしか旅行しないことにしている。月に数度、取材や講演旅行に行くのだが、どういうわけか、その三分の二以上が北行きの旅だ。

となると、どうしても上野駅からということになる。上野駅の、あの高架線ではない方の数本のプラットホーム。もうここから南の方には線路がなくて、ホームとホームがコの字型につながってしまっているあそこの雰囲気（ふんいき）が、いかにも始発駅という感じで、私は大好きだ。

じっと待っていると、何だかとおつぜん、「昔行き」なんていう行先標示板をつけた懐かしいSLでも入ってきそうな気がして、いつもたたずんでしまうの

だ。

この大都会の長い長い喧噪けんそうの日々の中に、ある日ふと、ほんの一瞬だけ、私たちが、そんな汽車を見つけることが出来るのだとしたら、そうして運がよければそれに乗って行けるもののだとしたら、母は、どの昔へ帰ってゆくのだろうか――。

あねっちゃん、おら、道に迷ってしまつて、なんと腹へつて腹へつて歩けなくなつてしまつて。申しわけねども。

よく母が語る思ひ出話の中で、一番古いものの一つが、五城目ごじょうめの話である。母がまだ子供のころに、母の両親が夫婦別れをして、母は、母親の実家のある秋田県五城目町にずっと住んでいたことがある。

その五城目町に、「せんだく乞食」という乞食がいた。

せんだく乞食が他の同族たちと違つていた点は、ぼろ着の着替えをちゃんと別に一組持つてゐることだった。そうしてそれを、ときどき川で洗つて、陽ひに

干していることだった。

夕方になると、乞食は、炊煙の上がつているどこかの家の台所口にひよつこりと立つ。そうして、夕食仕度をしている女にこう話しかけるのだ。

「あねっちゃん、おら、道に迷ってしまつて、なんと腹へつて腹へつて歩けなくなつてしまつて。申しわけねども、ちつちえ鍋つきさ、水こ少うし入れて、貸してけれひ。そのうち、おめどこ、いいどこさ嫁こに、世話つこしてやるからなあ」

おかみさんたちは、面白がつて、水を入れた欠け鍋を貸してやる。

「なんと、なんと、ありがどあんす」

乞食は鍋を受け取り、かまどの火を少し土間の隅っこに分けてもらい、石を拾つてきては並べて台にして、鍋をかける。

そうして、懷から出した別の小石を一つきれいに洗つて、なぜかその鍋の中へ入れる。

女がびっくりして見ていると、乞食は、今度は両手を合わせてこんなことを

歴史には、癒されない同じ哀しみの灯ほろほろともす道があつて、いつまでも往く人絶えることないのだろうか。

母は、自分に直接かわりのある記憶を語るときにはそういうことはないのに、思い出の中のこんな小さな他の人の話のときになると、いつも語りながら静かに泣く人である。

小学校五年生になった母は、秋田県土崎港町の学校から東京へ転校した。

それより少し前、母の両親が、十四年間の他人暮らしの後にふたたび結婚していたのだが、その父親が秋田市での事業に失敗し、夜逃げのようにして東京へ出てきたからだった。

転校した大井町尋常小学校は、そのころ女子生徒と男子生徒のクラスが分かれていて、女子クラスの級長は柳田さんという少女だった。大柄で目が大きく、しっとりとした肌を持っていた。いつもにこにこしていたけれど、でも、皆と

離れて一人つきりで見るところを見ると、ふと影のようなものが浮かんでくる

——そんな少女だった。

副級長はエビハラさんという子だった。彼女は金まわりのいい工場主の娘で、裁縫の、カイホウ先生は、彼女の家の仕立て物をやらせてもらっていた。だからだろうか、エビハラさんは、いつもクラスの中で勢力があった。氣立てが悪く頭も悪く、とても副級長など務まる實力ではなかったのに、だ。

やがて母たちは六年生に進級した。六十人のクラスのうち、女学校へ進学する希望を持っているのは十六人。その全員が近くの府立第八高等女学校を受けるのだった。

でも、その中に、クラスNO1の柳田さんは入っていなかった。

小学校での母は、目が大きくて背が高く、見かけは可愛気だが、勉強の成績はからつきし。おまけに、歳の離れた兄が進学相談で父代りに担任に呼ばれたとき、「どこの女学校を受けたいですか」と訊かれて、妹の受ける学校の名前さえ知らず、